
涼宮ハルヒの決断

brades

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涼宮ハルヒの決断

【Nコード】

N7510N

【作者名】

brades

【あらすじ】

ハルヒが倒れた。

そんなありえない光景に、さしもの古泉も一瞬茫然と立ち尽くしていた。

長門によれば、これはただの病気ではなく、またしても情報生命体云々の話らしい。

不安に駆られる俺の前に現れたのは、最悪の面子だった。

1話　く感染と取引く（前書き）

今回はハルヒが絶体絶命な危機ということで、キョン君の心の葛藤などを上手く描ければなあと思っておりますww

それでは、前書きをあまり長くしても邪魔ですので（笑）、本文へどうぞ

1話 く感染と取引

ハルヒが倒れた。

さっきまであんなに元気良く、いつも通り俺達に無理難題を押し付け、100Wのスマイルを振り撒いていたアイツが、急に何かに取り付かれたように何の抵抗もなく崩れ落ちる。

「ハルヒ!?」「涼宮さん!?」「……………」

全員同時に言葉を発していた。だが、今はそんなことどうでもいい。そんな場合じゃなかった。

「どうしたんだ、ハルヒ!?」

「涼宮さああん!しっかりしてくださあいいい!」

今にも泣き出しそうな朝比奈さんをよそに、古泉と長門は呆然と立っていただけだった。前者は驚きの余り、後者はいつものこと……いや、長門も動揺してたのかもしれない。

「古泉!!ボーツと突っ立ってないで救急車を呼びやがれ!!お前とのこの機関は何やってんだ!!」

あの一件があつて以来、俺は常にハルヒに何か無いか気にしてはいたのだ。だからこそ今の古泉が許せない。

「……すみませんでした、余りに予想外のことだったので、僕の思考が停止していたようです。直ちに機関に応援の要請をします。」

と言って古泉は部室を出て行った。だが、今回はただの病院だけじゃ済まない、そんな気がする。そしてそれがわかりそうな人物に、俺は心当たりがある。

「長門、わかるか？」

「現在涼宮ハルヒの体内を解析中。すでに約65%が終了している。全データ解析終了まで40分程必要。」

「頼んだぞ、長門。」

「・・・わかった。」

その後、ハルヒは機関の経営する、俺も冬に世話になったあの病院に運ばれた。様々な検査を行ったのだが、やはりと言うべきか、原因らしい原因は見つらなかった。

「データ解析が終了した。」

「本当か!？」

これほど長門が喋るのを待ち焦がれたことも久しぶりだな。とにかくこれで一安心だ。そう思っていた俺は、後々それがバカの考えることだと身を持って思い知らされることになる。

「涼宮ハルヒの脳付近に人工生命体の容態の存在を確認。涼宮ハルヒの脳に直接膨大な情報を送ることにより、爆発的な情報フレアを

引き起こすことが目的と思われる。

有機生命体の脳がこれ进行处理しきることは不可能。そのため、涼宮ハルヒの脳が周りに防壁を作り膨大な情報の侵入を防いでいる。不完全ながらシャットアウト状態のため、涼宮ハルヒは一時的なスリープモード、通称気を失っている状態になっている。」

説明が長すぎて何だかわからんが、とりあえずハルヒの頭に変な奴が侵入してきて、ハルヒに悪さしてるってことでいいんだよね？

「・・・大方。」

「治せるか？」

「涼宮ハルヒの脳内の人工生命体を駆除、その後涼宮ハルヒに流れ込んだ多大なジャンク情報を全て情報統合思念体の一手に受け持ち、処理する。」

「長門・・・それは・・・」

「貴方は気にしなくて良い。必ず涼宮ハルヒを元に戻す。貴方の為にも。だから、もう家に帰った方がいい。」

「でも、俺は・・・!!」

「大丈夫です。長門さんだけじゃなく、私もついていきますから。」

そこに立っていたのは、落ち着きを取り戻した朝比奈さんだった。

「キョン君は、何も心配しないでください。もうすでに、すごく顔色が悪いですよ?」

そう言われて気づいた。どうやら柄にも無く貧血症状を起こしているらしい。身体が物凄くだるい。

「それでは・・・すみません、お願いします。」

気だるい身体を引きずりながら、俺は家に帰ろうと歩いていた時だった。

「やあ、キヨン。涼宮さんの容態は大丈夫なのかい？」

「佐々木か。お前がここにいるなんて、珍しいな。」

そう疑ったのは間違いではなかった。なぜなら、今できれば会いたくなかった奴もいたからだ。

「こんにちは。お久しぶりです。」

橘京子。てめえと話すことはもう何もねえ。

「そう言わずに待ってください。今回はある重要な話をしに来ました。」

どうせお前等の大事な用事ってのは大体ハルヒの能力を手に入れることだろうが。もうお前たちに会いたくない。消えてくれ。

「だから早まらないでください！私は本当に重要な話をしにきたんです。」

「・・・なんだ？言ってみろ。」

「今、病院には誰がいますか？」

「誰って・・・ハルヒと朝比奈さん、それに今回の原因を取り除く長門だよ。」

「もし、そのキーである長門さんが意識不明になったら、貴方はどうしますか？」

「は？お前は何か言いたいん・・・」

すると、携帯が騒がしく鳴った。何だ、こんな間が悪い。電話の主は・・・朝比奈さん・・・！？
なんだろう、嫌な予感がする。

「はい、もしもし？」

「キョン君！？大変なんです！！長門さんが・・・長門さんが！！！！」

「！！！！」

俺は携帯を握ったまま、橘の胸倉を掴む。

「てめえ・・・！！！！長門に何をしゃがった！！！！」

「・・・私たちと取引しませんか？」

「取引・・・だと・・・！？」

俺は冷静になり、手を離れた。

やはりこいつらは味方なんかじゃない。こんな時に取引なんて、馬鹿げてやがる。・・・だが。

「貴方がもし協力的でなければ、涼宮さんと長門さん、両方を貴方は失うことになります。」

その言葉に俺はたじろぐしかなかった。

2話　く支配と微笑く

「・・・どういう意味だ？」

俺はもはや、コイツらを退けることすら忘れてただ茫然と立ち尽くすのみだった。

だってそうだろう？

俺がコイツらに協力しなけりゃハルヒも長門も失うだって？
ふざけるのも大概にしる。

・・・そう言つてやりたかったさ。

だが、向こうにはあの恐ろしい悪魔である「周防九曜」がいる。
情報統合思念体ですら敵う相手ではなかった天蓋領域ならば、ハルヒはともかく長門を消すことなど紙切れを切るようなものだろう。

このまま俺はこんなイカレた奴らに唯々諾々と従うしか無いのか？
待て、俺、落ち着け。

まだダメだと決まったわけじゃない。

取引内容が例えわかりきったことだとしても、少ない望みに賭けて
とりあえずコイツらの意見を聞いてみるんだ。

「・・・その取引内容ってのは何だ？」

「やっと話を聞く気になってくれたんですね！」

うるせえ、勝手に決めつけるんじゃないやねえ。

そんな笑顔、ハルヒの100Wのものに比べたらノミほども無いね。

「現在、涼宮さんの脳内に巢食っている正体不明の生物は、圧倒的

情報量を流し込み、対処しきれなくなった生物が抑えようと徐々に捨てていく記憶の隙間に入って着床します。逆に言えば、涼宮さんは反射的に脳内をシャットアウトしたため、それ以上進むことができずに立ち往生している状態なんです。」

なるほど、確かに長門も同じようなことを言ってたな。

「ただ、危険なのが涼宮さんがもし目覚めた場合。脳の隙間に入れば、涼宮さんは自身のコントロールが効かなくなり、非常に危険な状態になると思います。」

「・・・それで？」

「そこで、その生物の狙っている情報改変能力と生物を同時に取り除くんです。」

・・・やはりそう来たか。

以前のように直接佐々木に渡せ、とは言ってこなかったが、同じようなもんだ。

俺がそれを認めるとでも思うのか？

「待ってください！でも、そうしなければ皆さん全員が危険なんですよ！？」

「・・・は？」

「今回は間違いなく九曜さんの所とはまた別の力が働いています。私達は忠告に来てあげたんです。脳を支配された涼宮さんは、全ての人間の存在を否定するかもしれない。支配している生物にとって利益となるような世界を作るという可能性もあります。」

「……つまりお前らと手を結べって言いたいのか？」

「……端的に言えばそうなります。」

ふん！

俺はとつくにSOS団の団員なんだ。

どうせ結局はお前たちもハルヒの力が目当てなだけだ。

そう思っただけ俺は、病院に急ぎ足で戻った。

今思えばあの時の俺はどうかしていた。

去り際に

「……少し時間をくれ。」

と言ってしまったのだから。

病院では、ハルヒとは別室で長門が寝込んでいた。

どうやら意識不明の重体らしく、長門と話すこともままならない。

「ひぐっ……私が少し花に水をやろうと……うっ……部屋を

出て戻ってきたら……もう長門さんが倒れて……いたんですっ

……！」

朝比奈さんでさえも、泣きじゃくってまともに会話ができない。

「非常にまずい事態となりましたね。」

「ああ……まさか長門がまた倒れるなんて……」

そうだ・・・喜緑さんは！？あの人なら長門の代わりに・・・

「実は、僕もすぐに喜緑さんに機関の方からコンタクトを試みたのですが、全く応答がないのです。」

「そんな・・・！？」

古泉が言ったことが正しければ、最悪の場合、喜緑さんも倒れ伏せた可能性があることになる。

くそっ、何て間の悪い・・・！

「とにかく、今は涼宮さんが完全にフリーになってしまっています。この御二方は僕にお任せを。貴方は涼宮さんの元に行ってください。」

「・・・わかった。」

俺は古泉に二人を任せした後、ハルヒの病室へ向かった。
そこには・・・

「どこに行ってたの・・・キョン・・・？」

ハルヒが窓際で微笑んでいた。

俺はその光景に驚愕したが、それ以上に不気味で寒気が襲ってきた。
そこにはハルヒがいる。いるのだが、雰囲気がまるで違う。
・・・まさか。

「お・・・おい、ハルヒ・・・？」

「待ちくたびれちゃったわ。・・・ようやく起きることができた」

ハルヒは俺に向かって走り出した。

俺はすぐに異変に気づき、咄嗟に身を翻した。

やべえ・・・これは・・・本気でまずい。

ハルヒを照らした夕日に、反射する金属製の突起物が見て取れた。
おいおい・・・これじゃまるで朝倉じゃないか。

「どうしたの・・・キョン？あたしはキョンに会いたかったのよ？」

ハルヒの握るいかにも鋭く見えるくだものナイフが、俺を以前の悪夢と照合させる。

「は、ハルヒ、待てって！」

もう俺の知っているハルヒはそこにはいなかった。

3話 く停戦と同盟く

一体俺はどうすれば良いんだ!?

古泉を呼ぼうにもドアまで距離を取られてしまった。

朝比奈さんは泣き崩れ、長門はまだ気を失ったままだろう。

現に、ここでハルヒが目覚めてしまっているのだから。

「キヨン 何で逃げるのよ ?あたしがわからないの
?」

いいや、わかるさ。

今のお前は、ハルヒであってハルヒではない。

脳内に巢食うなんとか生命体が、ハルヒの脳に直接命令を下しているのだ。

だからこそ、こんな狂気してしまっている。

「一体お前の狙いは何だ!?!」

「 何のこと ?」

「お前がハルヒじゃないのはわかってる。なんとか生命体って奴だな?ハルヒの身体を乗っ取ってどうするつもりだ!」

「 フフフ 」

何てことだ。

やっぱりどう見てもこいつはハルヒではあるが、面影はない。このハルヒの不敵な微笑が、俺に更なる恐怖心を植え付ける。

・・・どうしたらいい？

この状況、ほぼゲームオーバーだ。
だってそうだろう？凡人の俺に超生命体を止める力はない。
ましてや、ハルヒだけでもトンデモパワーなのだ。

「私が欲しいのはあなた達の命　　。」

・・・なんだと？

俺たちの命・・・？

「あなた達の命を回収することによってこの少女は一人となり、自分の世界を滅ぼす意義を見出す　　」

・・・その力が目的・・・か。

やはりそうだったのか。

ハルヒを狙う理由は十中八九それだ。・・・だが、未だかつてそれは成功をみたためしはない。

「くっ・・・」

悔しさと、憎悪の念が俺を襲っていた。

「あなたは　　何も　　わかっていない　　」

突如、機械とも人間とも取れぬ音が頭の中で響いた。
この声・・・まさか・・・！

そう思っていた時には、すでにそこに奴はいた。

「彼女の力は 下位のリビング・エンテティには 理解不可
可 」

機械的な特徴のある声、異様に長く太い黒髪、そして何より見覚えのある制服。

「く……九曜……。」

ヤバイ奴がまた増えやがった。しかもこんな時にだ。
先の一件もあり、俺に再び緊張が走る。

「大丈夫かい、キヨン。」

その緊張は一瞬にして解かれた。
いつの間にか、腰を抜かす俺の元には、SOS団と対立関係にあるグループの奴らが揃っていたのだ。

「……何故お前らがここにいるんだ!？」

「言っただけです、私たちは今回はあなた方と手を結ぶ側だと。」

「……。」

橘は古泉のような胡散臭い笑みを浮かべた。……対立関係になつてくせに、妙にそういう所似てるんだな、お前ら。

「チツ……てめえらと停戦協定しなきゃなんほどの状況だとは

な。虫唾が走るぜ。」

・・・前言撤回。

この嫌味な藤原は朝比奈さんにどこもかしこも似てないね。

「茶番はおわったかしら？」

九曜のような機械的に声を発するハルヒもとい、情報生命体。

日が傾きかけていた・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7510n/>

涼宮ハルヒの決断

2011年6月9日03時18分発行